

大平さんの政治文章づくり

福島 正光

「文は人なり」という言葉がある。これは、文章一つから、それを書いた人の人格や個性、あるいは思想といったものが感じとられるということだろう。しかし、政治家の文章や演説原稿の場合には、必ずしもこの言葉は妥当しない。なぜなら、繁忙のほかさまざまの理由から、政治家は側近や親しいジャーナリスト、また、その政治家が役職にある場合には官僚や関係機関の職員などの協力者に自分の文章を代筆させる場合が多いからである。とくにその影響する範囲が大きい公的な文章の作成には、何人かの執筆協力者が存在するのがつねであり、総じて政治家の地位が高くなればなるほど、文章作成に關与する人間の数は増える。

政治家の文章のうち、協力者（あるいは利害関係者）の最も多いものは、おそらく通常国会冒頭に行われる首相の施政方針演説だろう。作成の手順は内閣によっていろいろだが、それに關与する者の数は、官房長官、各省庁の事務次官およびそのスタッフなど数十人に及ぶ。内閣参事官などの文章作成担当者は、それぞれの注文を入れて、何度も下書きを書き直す。しかも、最終的に原稿は閣議で決定される。むしろ首相もこの過程に何度かかわるが、こうして出来上がる文章は、官僚臭の濃い、およそ個性などとは無縁のものとなってしまうことがほとんどだ。

大平さんは、若いときから文章を書くのが好きで、政治家になってからもしばしば自ら筆をとって随筆

やエッセイを書き、それらの文章をいくつかの文集にまとめたほどだったが、その大平さんにしても、公的な文章を作成する場合には、他人の介在を避けることはできなかった。現に大平さん自身、池田内閣の官房長官として池田首相の施政方針演説のまとめ役をつとめたことがあり、そのころを回想した文章で、施政方針演説の原稿が多数の意見を徴して書かれざるをえないことを記した上、こう述べている。「(施政方針演説は)肝心のことを細大洩らすまいとすれば繁文冗長になるし、次元の高い雄渾なものにしようとするれば、その際省いたところが後で問題になったりする。簡略に流れず冗長に墮せず、しかも一つの思想をもって貫くこととするのはむづかしい。また、平易な文章を選べば不真面目だといわれ、荘重な文章にしようとするれば中身がないと非難される。どうやってみてもらうまいかない」。

これが、日本における多くの政治文章の宿命のようなものである。しかし、大平さんは、そうしたなかにあっても、時間の許すかぎり原稿に手を入れて、それに自分の文体を与え、自分の思想を盛り込もうと努力された。

私が大平さんのそうした作業を目の当たりにするようになったのは、昭和四十六年春、ある人の紹介で、大平さんにお目にかかり、文章づくりのお手伝いをするようになってからのことである。大平さんの文章を考えるに当たって参考になると思うので、そのころのことを少し書いておく。

「大平政策提言」

前尾繁三郎氏に代わって宏池会会長になったばかりの大平さんは、二つの重要な課題に直面していた。一つは、言うまでもなく、派閥の領袖として、総理・総裁の座をめざすことを明らかにすることである。当時の佐藤栄作首相は、沖繩返還のめどもついて、近く退陣することが明らかだった。ポスト佐藤を争う人びととしては、すでに三木武夫、福田赳夫、田中角栄、中曽根康弘などの諸氏の名が上がっていた。前

尾さんが総裁選への出馬を躊躇したことが、宏池会会長辞任をやむなくされた理由の一つだっただけに、大平さんは宏池会の内外に対して、この総裁選タービーに参加する意志を速やかに表明しなければならなかった。

大平さんが対処すべきもう一つの課題は、会長交代にまつわるしこりを解消することだった。表面的には円満な会長交代だったとはいふものの、宏池会内部ではまだ前尾系と大平系の反目がつづいており、下手をすれば派閥が分裂する危険があった。

当初、私は、宏池会の機関紙的存在であった雑誌『前進』を新しく編集し直すことへの助力を求められた。だが、前尾さんが、『前進』は自分の個人誌であるから、宏池会には勝手にさせないと言い出されたため、雑誌編集の仕事はしばらくペンディングとなった。そこで私は、雑誌の問題が落着くまでということ、すでにはじまっていた総裁選のための政策提言づくりに、スタッフの一人として編入されることとなった。しかし、編集の仕事にはいくらかの経験はあっても、政治的文章などまったく書いたことがない。私は、宏池会事務局の安田正治氏を手伝うかたちで、はじめての分野の仕事に手を染めることとなった。(雑誌『前進』は、結局、前尾事務所から発行されることになり、その後、宏池会は機関紙を発行していない)

宏池会では、大久保武雄代議士を委員長とする政策委員会が形成され、そこが中心となって、「政策提言」を起草することが決まった。第一読会の日程に合わせて、安田氏と私がそこに提出する文章を書くことを命ぜられたが、大平さんは、どういうものを書けとはまったく言わない。大久保委員長も、同じく何も言わなかったと思う。私たち二人は途方に暮れたが、与えられた時間はいくらかもなく、二人で夜なべして何とか一文をでっち上げた。誰からも見せろと言われなかったので、必要な数のコピーを用意しただけで、おそろおそろ読会に臨んだ。会議の場所に入ったところ、驚いたことに、大平系と前尾系と見られる

人びとが、まるでみんなで大喧嘩したあとの幼稚園児たちのように、二つに分かれて座っており、大平さんがその真んかにいた。

大平さんが読んでみるというので、安田氏と私が半分ずつ読んだと思う。それまでの政治的文書とはおよそ違った文体だったので、出席者はあつげにとられたのではなからうか。それでも、全面的に否定されただけではなく、いくつかの注文が出ただけで、散会した。大平さんは、文章については何も言わず、次の日程を決められた。

こういうことが三日おきぐらいに三度ほど繰り返された。私たちは、そのつど、参加議員の注文を入れて、全体にわたって文章を書き直した。文章の体裁も、最初とはまるきり違うものとなった。どうやら私たち自身も、政策提言の文章とはこういうものかな、と思えるようなものが出来たころ、大平さんは「おれが手を入れてみる」と言い出された。

それからが大平さんの仕事だった。大平さんは、原稿が真っ黒になるほど鉛筆で加筆修正され、それが終わると、直ちに「明日までに」と清書を命ぜられた。清書が出来上がると、また新たな文章に手を入れるような熱心さで、再修正に取りかかった。こうして修正された原稿が読会に提出された。読会の回数は全部で十回以上に及んだと思うが、大平さんはそのほとんどすべてに参加した。その間に、その年（昭和四十六年）夏の宏池会の議員研修会で、この文章を「大平政策提言」として発表することが決まった。

読会の議論は次第に白熱してきた。面白いのは、回を重ねるうちに、前尾系と見られる人びとのうちからも、興味を感じて参加する人びとが出てきたことである。あとから考えると、それは、大平さんの計算のうちに入っていたように思う。大平さんは、文章の作成過程に非常に気を使っており、「次の会には、誰々先生にも出ていただくように声をかけよ」など、細かく指示された。政策提言の文章作成作業を、派内の意志統一の手段と考えておられたのだらう。

いまも新鮮な時代認識

政策委員会で議論となった最大の問題点は、言うまでもなく、日中国交正常化問題だった。前年（昭和四十五年）秋の国連総会では、国府追放のアルバーニア決議案が過半数の賛成を得て成立した。北京政府の加盟は、三分の二の賛成を要する重要事項指定の決議案で葬られたものの、それが成立することは時間の問題と見られた。こうした情勢を背景に、日本の政界では日中国交回復を望む声が急速に高まりつつあった。そして、政策提言作成中の昭和四十六年七月十五日、アメリカ政府は、ニクソン大統領が翌一九七二年（昭和四十七年）の五月までに訪中するむね声明した。宏池会政策委員会のほとんどのメンバーは、大平さんに北京政府承認を盛り込むよう迫ったが、大平さんは、ハッキリした態度を示さなかった。これは、大平さん自身の対中観にもよるだろうが、それ以上に、自民党だけでなく、宏池会内部にも、北京政府と国交回復した場合、台湾との関係をどうするかについて、割り切れない思いを抱く人びとがいることを強く意識しておられたからだと思う。しかし、宏池会の若手・中堅の人びとが、「日中国交回復に触れない政策提言など無意味だ」と言い出すにいたって、大平さんも決意を固められたように見えた。

もう一つの問題は、日本がめざすべき国家ビジョンをどういう言葉で表現するかということだった。さざんさん悩んだ末、私たちは「田園都市国家」という言葉を提案した。政策委員会の参加者のなかには戸惑いの色を表す向きもあったが、大平さんはためらうことなくこれを採択された。

七月の末か八月のはじめ、大平さんは政策委員会のメンバーに、「あとは私に預らせてくれ。内容は外部に洩らさないように」と言って、議員の手もとから原稿のコピーを回収するよう、私たちに命じられた。そして、その後さらに、大平さんの加筆・修正がつづいた。日中国交回復問題についての表現が最終的に決まったのは、それからである。

大平さんによる文章の手直しは徹底的なものであった。挿入句や形容詞は何度も取り替えられ、語尾も力強いものに変更された。せつかく出来上がったパラグラフが全面的に書き換えられた。とくに冒頭の時代認識の部分には、何度も推敲が加えられた。いま読み返してみても、この部分は、いま書かれたばかりのように新鮮であり、到底二十三年前の認識とは思えない。

「わが国は、今や、戦後の総決算ともいうべき転機を迎えている。これまでひたすら豊かさを求めて努力してきたが、手にした豊かさの中には必ずしも真の幸福と生きがいが発見されていない。ためらうことなく経済の成長軌道を力走してきたが、まさにその成長の速さの故に、再び安定を志向せざるを得なくなってきた。なりふりかまわず経済の海外進出を試みたが、まさにその進出の激しさの故に、外国の嫉視と抵抗を受けるようになってきた。対米協調を基調として国際政治への参加を避けてきたが、まさにドル体制の弱体化の故に、けわしい自主外交に立ち向かわなければならなくなってきた。国をあげて自らの経済復興に専念してきたが、まさにわが国の経済の大型化の故に、国際的インサイダーとして経済の国際化の担い手にならざるを得なくなってきた。

これはまさに大きい転換期であるといわなければならない。この転換期に処してこれからの方向を誤らないことが政治の使命である」。

私たちが最初に起草した文章は、もはやまったく原型を止めていなかった。

大平さんの政治文章作法

大平さんのこの「政策提言」は、昭和四十六年九月一日の宏池会の議員研修会で、「日本の新世紀の開幕」と題して発表された。それがどのような反響を呼んだかは、本稿の趣旨ではないので省略する。以後、四十七年七月五日の自民党総裁選挙までに、さらに五つの大平政策提言が「潮の流れを変えよう」シリーズ

として発表され、安田氏と私はそのすべてに関与し、その後も折に触れて大平さんの文章作りのお手伝いをする事となった。この過程を通じて、政治文章をいかに書くべきかについて、私は実に多くのことを教えられた。以下に簡単に、私が大平さんの政治文章作法と考えるところを記しておきたい。

第一は、発想についてである。

大平さんは、政治というものをつねに国民の立場からとらえていた。それは次の大平さんの文章にも明らかである。「私はすべての国民が現に政治に参加していると思う。一つ一つの家庭や企業が立派にならなければ、日本と日本の政治は立派にならない。……いわば政治は、国民全体の一大オーケストラのようなものである。それぞれの楽器の音色が合唱の中に入り込み、調和のとれたリズムと重量感を生産するようになれば、それがそのまま政治になるのだと思う」。そういう大平さんは、また、国民を深く信頼していた。大平さんが、選挙結果について「国民が絶妙なバランス感覚を發揮した」と評した言葉を聞いたものは多い。大平さんが一般消費税導入の必要を総選挙で訴えようとしたのも、説得すればわかってもらえるという国民への強い信頼感があつたからだ。

前記したように、私たちに草稿を書かせるとき、大平さんは、こういうものを書け、とは決して言わなかった。したがって、私たちはいつも、大平さんの思考の足跡を追いかけることにとめたが、それでもしばしば、いったい何をどう書くべきかに迷った。あるとき、ふたりでホテルに泊まり込んで作業に取りかかったのに、一夜費やしてもついに一行も書けず、翌朝早く瀬田の小平邸に謝りに行ったことがあつた。大平さんは早い朝食の最中だったが、案に相違して、「やはり書けなかつたか」とたいへんにご機嫌で、紙と鉛筆を持ってこさせ、皿や茶碗を片づけたテーブルで、いきなり自分の考えを書きはじめた。おそらく大平さんは、何を書くべきかについて、自分でも一晩考えていたのだらう。

こういう失敗があったので、私たちは、どういうテーマを書くにしても、文章を発想するスタンスを、私たちに確立しなければならなかった。その答えが、国民の立場から発想するということである。つまり、マスコミなどがふりまいている既成概念や永田町の論理に煩わされることなく、国民が何をどう問題だと感じているかを自分の頭で考えることである。それが見えてくると、自ずと何を書くべきかが明らかになるように感じた。(私はひそかにそれを「想念の芽生え」と呼んでいる) 大平さんから、そうしろと言われたわけではないが、これが、大平さんの政治文章づくりをお手伝いしたあいだに感得した最も重要な教訓だったと思う。

第二は、主題についてである。

ここで言う「主題」とは、何を言いたいかということだ。だから「主張」と言い換えてもよい。私たちは、日ごろおびたしいイシューや見解に取り巻かれており、そのため、文章で何かを主張しようとする場合にも、それらに振り回されて、自分の主張に関連することについて、すべて言及しなければならぬように思いがちである。しかし、あまりに多くのことを扱えば、何を言いたいのかがよくわからなくなる。これは、政治文章をつくる上で陥りやすい誤りの一つだろう。先に述べた首相の施政方針演説が、各方面からの注文をすべて取り入れるため、何を主張しているのかわからなくなるのがその例である。

したがって、説得的な文章をつくるには、何を取り、何を捨てるかの選択がきわめて重要だ。この点、大平さんの判断は実に的確だった。

大平さんは、私たちの書いた素案のなかで不必要な部分を遠慮会釈なく削除し、ご自分が書かれた文章もほとんどカットされた。せつかくの「名文句」がバサバサ切られて、くやしい思いをしたことも少なくなかったが、大平さんが整理したあとで清書してみると、文章の主題がはっきりと浮かび上がっていることがわかった。私たちは、そういう大平さんを「大デスク」とあだ名した。

第三は、構成についてである。

大平さんが手に入れた原稿を見ると、ワードやセンテンスやパラグラフが、実に頻繁にあちこちに移動されていることがわかる。それは、大平さんが複雑な問題をわかりやすい姿にまとめ上げようとする努力の軌跡だった。

私は、名作家として知られる緒方竹虎氏の文章づくりについて記したものを讀んだことがあるが、それによると、緒方さんは、まず何枚もの短冊を用意し、一枚一枚に自分の頭にあることを短く書いた。次に、その短冊全部を疊の上に並べ、何度も並べ替えて納得のいくような配列ができると、その順序に従って一気に文章を書き下ろしたという。大平さんのやり方も、基本的には同じだったのだろう。ただ大平さんの場合は、緒方さんの短冊作業が頭のなかで行われたという違いがあるだけのことだった。

第四は、表現についてである。

他の政治家の文章とはちがって、大平さんの政治文章は、一読して大平さんが書いたものとわかる。それは、大平さんが、政界で頻繁に用いられる決まり文句を使うことを嫌い、政治的な問題や出来事を、それまで政治文章に用いられることのない言葉で表現することが多かったからである。日常的な生活用語が登場することもあったし、哲学的な表現が顔を出すこともあった。また、ときには漢籍や聖書からの引用が、それと示されずにさりげなく使われた。そうした引用は、文章だけでなく、講演や記者会見などでも出てきたので、新聞記者が面食らって出所探しにあわてふためくという場面もあった。大平さんの語句の豊富さが、若いときからの読書量の豊かさに裏付けられていたことはもちろんだが、それはまた、気に入った言葉をつねにノートに書き抜いておくというような日頃の努力の結果でもあった。

二、三の例を上げておこう。

・「(参議院は)政治に最後のカンナを、かけて仕上げをしていただかなければならない第二の院でござい

います」。

・「各民族国家が……どうして自らの安全と生存を確保するかに狂奔しながら、命がけの疼きのなかにありますことは、ご案内のとおりであります」

・「自由民主党はサラブレッドのような恰好よさは持っていないが、コッテ牛のような強靱な実行力は持っている政党であります」

・「小魚を煮るような細心さと山のような勇氣をもって……」。

どうしても生硬になりやすい政治文章のなかに、大平さんが一句挿入するだけで、文章全体の雰囲気さがらりと変わり、政治がそれまでとは違った身近なものに感じられた。それは大平さんが政治を国民の立場から見ているという証拠でもあるだろう。

大平さんは、晩年さかんに「誰にでもわかる文章にしてくれ」と言われるようになった。表現も簡素で平易なものを求められた。私たちは、そういう大平さんの要請にとうとう十分応えることができなかったが、大平さんは、同日選挙直前の最後の街頭演説で身をもってその手本を示された。

大平さんの文章を論ずるに当たっては、政治文章だけでなく、いくつもの文集に収録されているすぐれた私的な随想やエッセイ、あるいは甲辞のたぐいを取り上げることが必要だろう。文章論としては、そのほうが本筋かもしれない。とりわけ「池田政権の座標」（昭和四十一年）、「長男正樹の思い出」（昭和四十一年）、「私の履歴書」（昭和五十三年）、「私のマドンナ」（昭和五十三年）などは、何回読んでも心を打つ文章で、大平さんならではの深い味わいがある。しかし、文章論の専門家ではない私としては、自分自身がかかわった範囲でしか語ることができなかった。政治文章づくりの不肖の弟子として、師の業績のほんの一部しか紹介できなかつたことを、申しわけなく思つ。

（著述家）